

新型コロナウイルスに勝つ！

早稲田大学教授 森山卓郎 もりやまたくろう

新

型コロナウイルスの感染拡大で、去年はまさに大変な年だった。いや、まだ過去形ではない。まだまだ今も大変である。

この「コロナウイルス」という名前は、電子顕微鏡で見ても、そのウイルスの周りから「太陽のコロナ」のような突起が見えることからつけられたという。そうすると、これは比喻からの名づけと言える。そもそも「コロナ」というのも、もとは「王冠」という意味だから、そこにも比喻がある。このウイルスの名前はいわば二重の比喻になっている。

そして、「感染拡大」。この言葉にも比喻的な発想がある。あくまでも、現象としては、コロナウイルスに感染する人が増えている、ということだ。しかし、「感染者増大」と言わずに、「感染拡大」と言うと、個々の「人」は表現されないことになる。「感染」という抽象的な状況が、「拡大」という、あたかも平面的な領域の変化であるか

のように比喩的にイメージされた表現なのだ。そういう表現のしかたなので、反対(対義)の表現は、「拡大」の本来の反対語である「縮小」ではない。「新型コロナウイルスの感染縮小」なんかではまだまだ足りなさすぎる。「感染の終息」でなくてはならない。

新型コロナウイルスの肺炎にかかった人によれば、針で肺を突き刺すような猛烈な痛みだったという。割れたガラスを肺いっぱいに入れられたような痛みという表現もあった。こうした比喻から痛みと苦しみのほどが想像できる。

この病気で命を落とす人も多い。「死ぬ」と「命を落とす」は同じようで実は違う。長寿を全うして死ぬときなどは「命を落とす」という表現は使わない。本来、「命」は落下するような物ではない。「命が落ちた」とも言わない。「命を落とす」という言葉は、かけがえのないものを失うという無念さにつながる、比喩的発想による表現

なのだ。「コロナで命を落とす人」は、たとえ一人でも少なくしなければならぬ。

本当に大変な病気だ。「コロナウイルスと戦う」「コロナ対策の最前線」「ワクチン」という新兵器」などの表現もある。私たちは、「戦い」として捉えている。これも比喩的だ。ただ、「争い」ではない。我々の命と生活を脅かす「脅威への対抗＝戦い」なのである。

今こうしている時も、危険と背中合わせに、医療や対策などの最前線で戦い続けて下さっている関係者の皆様の存在がある。捧げる感謝の言葉が本当に見つからない。

せめてできることは、まず、私たち一人一人がかからないようにすること。あろうことかコロナ差別などという愚かなこともある。しっかりと知識と良識をもって行動することも「戦い」だ。耐えて、支え合っていて、感謝を忘れず、がんばろう。この戦いに我々は絶対に勝つ！